3・11文学
―被災地出身作家が伝えるもの―

范　　淑　文*

【要旨】

2011年に発生した大惨事東日本大震災、所謂３・11から2021年３月で十年になる。震災直後、川上弘美、多和田葉子、高橋源一郎などの作家が、地震やそれに伴った原発の災害と真剣に向き合い、次から次へと文学作品を発表した。そうした文学活動の影で、それらの創作に遅れること四年、岩手日報社の企画のもと、地元岩手県出身の作家12人による短編集『あの日から』が漸く結実し、出版された。多くの研究者に注目された冒頭の作家たちの作品に比べ、岩手県出身の作家たちによる短編集『あの日から』は、研究者に忘れられているのが現状である。

よって、短編集『あの日から』を考察の対象とし、作家たちの注目点に着眼し、そこから生じた課題や震災からの示唆など、それらの作家が伝えようとするメッセージを明らかにすることを拙稿の主旨とする。

一般の人々に比べ、以上の作家たちはもっと死者の声に耳を傾け、またその心が聞こえる。それらの作家が伝えようとする共通のメッセージは様々な愛と言えよう。また、死に切れず、彷徨っている魂の傷がどれほど深かったものか、死者の代わりに伝えようとする作者の意図も垣間見できる。

＊国立台湾大学教授

１．はじめに

2011年に発生した大惨事東日本大震災、所謂３・11から2021年３月で十年になる。震災直後、さっそく川上弘美、多和田葉子、高橋源一郎、古川日出男などの作家が、地震やそれに伴った原発の災害と真剣に向き合い、そうした震災をめぐる文学作品を次から次へと発表した。そうした文学活動の影で、それらの創作に遅れること四年、岩手日報社の企画のもと、地元岩手県出身の作家12人による短編集『あの日から』[1]が結実し、2015年に発刊された[2]。冒頭で紹介した作家の作品とどこが違うのだろうか。論者はこの点に興味を持った。

こうした大惨事に直面していたのは、作家のみならず、文学研究の中でどう向き合うべきか戸惑っていた研究者も少なくなかった。その一人石井正己は「大事なのは、目の前の現実から逃避せず、自明とされた文学研究を問い直し、社会とどういう関係にあるのかを認識していることだ。」[3]と、災害そのものや復興などの研究より、社会との関係という研究の主軸を提案し、研究者のあるべき姿勢を指摘している。上掲した川上弘美、多和田葉子など、福島の原発事故（或は事件）やそれによる人間や生態に及ぼした被害に焦点を合わせた作家の作品は、発表後早速多くの研究者に注目された。例えば、曾秋桂（2016）「エコクリティシズムから読むポスト311文学作品―多和田葉子『献灯使』を中心に―」[4]、（2018）『生態與旅行：台日韓當代作家研討會論文集』[5]、范淑文（2019）

「作家に語られた震災―多和田葉子を中心に」[6]、范淑文（2020）「作家が語る311―川上弘美と多和田葉子を中心に―」[7]、などの研究成果が挙げられる。また、北田幸恵「米谷ふみ子と反戦――ヒロシマ・ナガサキから〈ふくしま〉以後へ」[8]といった福島原発事件から原爆問題に至るまで遡っている研究や、長谷川啓の「3・11後のフェミニズムに向けて」[9]という、3・11より示唆され、新たな視点でフェミニズムを考える研究などが続出している。

以上のように、福島原発事件が人間や生態に及ぼした被害を描いた類の作品が、もっとも研究者の注目を集めている。それに比べ、被災の地と人に焦点を合わせた岩手県出身の作家たちによる短編集『あの日から』は、研究者に忘れられているのが現状である。成元哲が2017年に行った被災地への調査報告書には、「同時に、事故の風化を不安に思う声は年々増加傾向にある。」「日常生活は震災前の時と変わらないくらいにはなりましたが、被災した私たちでさえ当時の大変な時を忘れかけています。このまま風化してしまうのではと心配しています。」[10]などのような被災者からの声が上がっている。それらの声の通り、未曽有の大惨事とはいえ、時間が経てばその恐ろしさや被災者が伝えたかった経験が風化してしまう。[11]そうした風化への心配からであろうか、岩手県出身の作家たちが四年をかけて漸くそれらの苦しみや悲しみを何らかの形で語れるようになって創作した作品はとりわけ意義があるだろう。[12]

今回その短編集から、高橋克彦「さるの湯」、斎藤純「あの日の海」、澤口たまみ「水仙月の三日」、沢村鐵「もう一人の私へ」、石野晶「純愛」との５篇を主な考察の対象とし、被災地出身作家の注目点に着眼し、そこから生じた課題や震災からの示唆など、それらの作家が伝えようとするメッセージにアプローチしてみる。

２．高橋克彦「さるの湯」

「私」が、被災地で撮った写真を照山という町の人に見せたら、写真には津波で死んだ人が続々と写っていることで話題になり、町の人々が集まってくる、というところから物語が始まる。

2.1　死に切れなかった死者

「私」はアマチュアのカメラマンでありながら、何かの因縁でカメラを抱えてこの町に写真を撮りに来たと語られている。「この地域の若者たちのリーダー」である照山は「私」が撮影した写真に沢山の死者が写っていることを皆に知らせ、津波で行方不明になった人々の遺族らが驚きながら、写真に写っている死者を確認する。その写真の写り方や「遺族」の描写を見てみよう。

- 遺族や知人によって確認された人々は、その指摘がない限りどう眺めても死者とは思えない明るく和やかな表情だったのだ。反対に、生きている側が沈痛な顔をしていることの方がずっと多い。（P8）
- 照山に私もしみじみ頷いた。
  「それだけ死んだ数が多いってことか」
  照山は遠い目をして呟いた。（P15）（引用は、道又力編（2015）『あの日から』による。以下同様。）

実は終盤になって漸く照山を含め、様々な「死者」の魂が彷徨っている様子が語られ、ストーリー全編は、死の世界であるようで、また生の世界としても描写されている、つまり生と死の境がはっきりしていない世界が描かれている。更に「遠い目をして呟いた」という照山の表情から災害の惨たらしさに対する虚しさ、無力さがうかがえよう。自分の死を受け入れた死者は、和やかな表情に写っているのとは逆に、照山のように「生きている側」の人々は、死を拒み、死に切れない、「生者」を装っている存在と言うしかない。「この地域の若者たちのリーダー」である照山がその代

表的な一人で、みんなの安否を懸念し、自分に責任があると感じているため「沈痛な顔をしている」のであろう。案内役のように更に「私」を死の世界「さるの湯」まで連れて行くのである。

2.2　とうとう死と向き合う「私」

「あんたが撮影すっと死んだ皆が戻って来る」という照山の言葉だけなら、「私」はまるで「霊魂探しの撮影」という類のところに結びつく。ところが、その話の弾みに、「さるの湯、ってとこがあるんだ」（P15）と照山は思い出したように唐突に「私」に話した。誰も行かない村の奥にある「さるの湯」、「死人が最期に入る湯」と言われる所へ撮影に行こうという照山の提案に「私」はすぐ乗ってしまい、丹野という男も加わり、「さるの湯」に向った。

その結果「さるの湯」で成仏できずに彷徨っている様々な死者の霊とともに、照山も丹野も、最後に「私」自身も死に切れない霊であったことが判明した。作品をもう一度読み返すと、途中から「私」の存在を怪しく匂わせる描写が見られる。

- 「あんたのアパートを訪ねたとき、……大学時代の仲間の部屋を思い出しちまった。片付いているけど、そいつの匂いがしねぇ。ただ寝る部屋って感じ。そしたら間もなくそいつはおれたちの前から消えた。」（中略）八歳のときに母が首を吊って死に、私は擁護施設に入れられた。それ以来まともに人生と向き合っていない。（P21）
- 親父のせいで母さんは死んだ。母さんとおれがどんなに辛い毎日だったか知りもしないで親父はのうのうと酒を食い女と楽しんでいる。許せなかった。殺して当たり前の親父だと思っていた。（P35、36）

前の引用文は「さるの湯」に向う途中、照山が「私」と初めて会った時の印象である。「親父を手にかけたのは二十歳の時だ」という「私」の陳述と合わせて考えてみれば、照山がいう高校時代突然消えてしまったその仲間が即ち「私」である可能性はないこともない。そして、「さるの湯」の前で撮った写真に色々な人の姿が浮かび上がってきた。その中の一人は「私」の母親である。そこから昔ずっと心の深層にしまっておいた記憶、意識的に消そうとした記憶が蘇ってきた。父親のせいで母親が憐れな人生のままで早く死んでしまったこと、その憎悪で父親を崖から海に突き落とし、そのような自分も許せず飛び込んでしまった、という記憶であった。

その父親を殺したこと及び自分の死は完全に消化できなかっただろうか、「私」は自分が死んだことを認知できず、魂がずっと彷徨っていたのである。照山の協力のもとで、「さるの湯」で死者や自分の死と真正面から向き合い、漸く悔いなくあの世へと渡ることが出来たのである。一方、照山や丹野たちも「私」の現れが導きとなって、自分たちも徐々に死を受け入れたのであろう。

こうした語りや写りという手法を通して、2015年の時点でも沢山の行方不明者への鎮魂という作者の意図がこの作品で垣間見できよう。

3．斎藤純「あの日の海」

60歳程の元警察官の主人公川野康雄が盛岡の街の一角で雨宿りをしていたところ、二人の若い警察に声を掛けられ、盛岡東警察署まで「同行」させられた。そこで、川野の行動がある事件とかかわりがあるかのように疑いの眼で事情聴取されている。取り調べられながら、川野は、頭の隅でそれまでのことを回想していた。ある詐欺事件で被害を受けた妻美津子の死、息子康一の「オートバイ事故で」の死、更にその後川野が進めてきた復讐について、回想する形で語られていく。

3.1　復讐を図る主人公

息子康一が中学一年の終わりごろから悪い仲間と知り合ったのがきっかけで、不登校となり、母

親に暴力を振るような子供に変わった。誰にも相談できない境地に陥れられた美津子は精神状態に異常をきたし、息子の金銭欲を満たすために家を闇金融業者に抵当に出してしまい、「汚い罠にハマって借金地獄に陥り」（P183）、半年後亡くなった。康一は母親の死には自分自身も責任の一端があると感じ、母親の後を追って青森市の城ヶ倉大橋から、投身自殺した。父親川野の警察官という体裁を考慮し、刑事部長の小野寺警視正が外部に対して、「橋から身を乗り出したときに足を滑らせるかして、誤って転落された」（P174）と事故死として処理してくれた。

その一連の事故や事件が起こるまで、川野は息子の不登校や悪い仲間とつるんでいること、また妻がそうした精神の苦境に立ち、詐欺師である倉持真奈美に追い詰められていたことに全く気付かなかったのだった。一家の家長としての責任感か罪悪感からだろうか、辞表を出し、倉持真奈美への復讐を誓ったのだった。

様々な下調べをとおして、十年前に夫を亡くした倉持真奈美は、現在息子と親子二人で海辺にある二階建ての屋敷で暮らしており、息子は月に一度仕事で二日間留守することが分かった。息子が留守している間に、真奈美はホストクラブの男を家に呼んで「息抜き」をする情報までキャッチした。川野はその男の弱みを利用し、真奈美の「息抜き」を終え、屋敷を出るときに、自分が入れるよう細工をするように男に指示しておいた。計画通りに、順調に屋敷に忍び込んだ川野は、昔の杵柄を生かし、手早く真奈美をしっかりと抑えつけ、その家の財産―ダイヤモンド―が入れられている金庫を真奈美に開けさせた。ここまでは計画通りに万事スムーズに進んできた。

3.2 「敵」に手を差し伸べた主人公

しかし、川野が金庫の中を覗きこもうとした瞬間、「あの日」の出来事が発生した。「何かが倒れる音や食器の割れる音」とともに地鳴りのような音が混じって聞こえてきた。あまりにも突然なことで、二人は一瞬思考を忘れ混沌状態になった。次の瞬間冷たい海水で、ハッと意識が戻った川野は金庫の中身が気になったが、流れ込んできた海水の水位がどんどん上がり、あっという間に二人は二階まで押し流された。この津波の混乱の中での二人の振舞に注目したい。

⑴　ガラス鉢が真奈美の頭を直撃した。真奈美の体から力が抜けた。その上からなおもガラス工芸品が落ちつづける。川野は反射的に真奈美の上に体を重ねた。（P188）

⑵　川野は真奈美を抱きかかえたまま海水に流され、二階まで押し上げられた。（P189）

⑴は地震が起きた途端、その揺れで家具や食器、飾り物などが落ちた様子の描写である。落ちてきたガラス鉢が真奈美の頭に当たったのをみて、川野は「反射的に真奈美の上に体を重ね」て、真奈美を守ろうとしている。それに引き続き、⑵はまだ失神から覚めていない真奈美を一階のベッドの上に一旦下ろそうとしたが、海水の流れの速さに驚いた川野が再び真奈美を抱きあげたシーンである。地震、津波が起きているほんの僅かの間、川野は別人のように態度が打って変わった。川野は妻と息子を死に追いつめた「詐欺、恐喝の常習犯」である倉持真奈美を心より憎み、彼女が騙し取ってきた財産を奪おうと計画していたが、地震や津波を目の当たりにして、自分の身の上の危険を顧みず、少しも躊躇う様子もなく、必死に真奈美を守ろうとしている。復讐の相手であった真奈美への救助はまだ続く。

⑶　そのとき、真奈美がアッと短く声を上げた。／真奈美が指さすほうを見た。瓦礫にしがみついて少女が流されてくる。（中略）真奈美は流れに飛び込んだ。少女が掴んでいる瓦礫に手を伸ばし、掴んだ。（中略）ロープの端をしっかり握り、もう一方の端を真奈美に向かって投げた。（P192、193）

⑷　真奈美と少女がしがみついた瓦礫が流され

だした。／川野は流れに飛び込んだ。心臓が止まるかと思うほど海水は冷たかった。／瓦礫に向かって泳ぐ。（中略）海水から顔を上げたときに少女と目が合った。／〈よく頑張ったな。助けてやるぞ〉／川野は少女に声をかけた。少女は頷いたように見えた。／しかし、真奈美の姿がなかった。（P194）（改行を／で示す。以下同様。）

⑶は、窓から海水が一面に押し寄せてきた外の風景を眺めているうち、一人の少女が流されているのが目に入り、真奈美は少女を助けてあげたく、何も考えずに窓から津波の流れの中に飛び込むシーンである。それを見てびっくりした川野は急いで千切った布で作ったロープを真奈美の方に投げて助けようとした。が、⑷に抜粋している叙述の通り、少女への助けを諦めろという川野の声を無視して真奈美は必死に少女を助けようとした。仕方なく後を追って川野も流れに飛び込んだが、結果としては少女は助かったが、真奈美は濁流に呑み込まれた。少女を抱きかかえたまま数時間か経ったあと、漸く暗闇の中、助けの懐中電灯の光で自分の顔を照らされた瞬間、川野は「安堵の涙を流した。」

津波に命が奪われる瞬間、人としての本能が働き川野は恨みを忘れてしまい、敵だった真奈美を無意識にも助けてあげた。川野のみならず、警察の眼には「詐欺、恐喝の常習犯」である倉持真奈美さえ、自分の命が脅かされるほど危険な目に合うのも構わず、溺れそうな少女を必死に助けてあげた。パニック状態に陥っており判断力を失っているため、真奈美はあんな無謀な行為をしたのだろうと川野は思っていたが、「被災地で実際に起きた犠牲的な行動の数々を見聞きしているうちに、真奈美は女性ならではの本能から、考える間もなくとっさに行動してしまったのだと川野は考えるようになった。」（P200）真奈美に対しての恨みが消えたのみならず、それまで自分のやってきたことについても反省させられたのだった。

「無意味に思えたんだよ、私のやってきたことが。絵だけにかぎらず、すべてが――」（P177）という川野の言葉のとおり、勿論それまで真奈美への恨み、彼女への復讐も含め、すべてのことは命の前では無意味に思えたのであろう。確信はできないが、「東日本大地震に遭遇していなければ、間違いなく犯罪者になっていた。もちろん、不法侵入をはじめとする犯罪行為は犯しているが」（P199）と、もう少しで犯罪者になるところを助けられたことに川野は感謝している姿がうかがえよう。言葉を換えれば、世の中のさまざまな恨みの「無意味」さや命の尊さをここで強調される作者の姿勢も垣間見ができよう。

４．澤口たまみ「水仙月の三日」

「わたし」と「彼」は四年前の４月11日に結婚式を挙げ、山の上で二人の生活を始める予定であった。が、その一か月前の津波で「彼」が帰らぬ人となった。「わたし」は悲しみのなか、二人の約束通りに山の上に引っ越し、「彼不在」の新婚生活を始めた。やがて、「彼がわたしに残していったものがあることに」（P325）気づき、両親の反対にもかかわらず、赤ちゃんを産んだ。光と名付けた赤ちゃんが加わった「親子三人」の生活を「わたし」は楽しんでいる。鳥に詳しい「わたし」と魚の研究者である「彼」、さらに息子か娘が将来虫好きになれば、「無敵の調査チーム」になるなあと、「彼」が生存していた時に二人でこんな夢を語っていた。「自然と共鳴するひとになってほしかった。」「光を一人前の虫好きにするという、彼から託されたミッション」（P327）を全うするかのように、近所の図書館に偶に足を運ぶ以外に、息子光とほぼ毎日、空の星や月、地上の虫や花、更に石にまで自然との会話をしながら親子で山の上で、自然に溶け込んでいるような生活を味わっている。「わたし」はすべての被害者遺体発見の関係情報を遮断するためテレビなどは

新居に持ち込まなかった。

4.1 「彼」からの最後のメッセージ

山の上の暮らしに満足しているかのように親子の生活を楽しんでいたが、「彼」がなぜ帰らぬ人となったのか、「あの日」の朝、魚を含む環境調査の仕事で出かけた「彼」から珍しくかけてきた電話のメッセージは、一体どんな意味を持っていたのかなど、時が経つうちにますます不審に思うようになった。「あの日」の朝、「彼」が仕事場から、「ぼくは、空の仕掛けが外れる瞬間を見るだろう。今日、遠い遠い東の海のほうでね。念のため、きみも気をつけて過ごしてくれ」（P322）という電話のメッセージだった。

ある日、図書館で親子二人で本を読んでいるとき、光が何気なく手に取った「水仙月の四日」という賢治の童話がきっかけで、「わたし」はそれまで封じたままの「彼」の手帳やメモなどを徹底的に調べようと思った。漸く「彼」からの最後になるメッセージの謎を解くことができた。

宮澤賢治の「水仙月の四日」の読み方について、渡部芳紀は「この雪の世界で展開される子供と雪童子との暖かい愛の物語が〈雪中花〉なのである。〈水仙〉なのである。」[13]と、水仙に触れながら、登場人物の交流に注目し、モチーフを見出している。いずれにしても、作品の中では、「彼」が手帳に付けた日にちが「わたし」は気になり、「はたして、二〇一一年のイースターは四月二十四日、灰の水曜日は三月九日で、水仙月の四日は三月十二日であった。／なんと、あの日と一日違いである。」（P347）ということに気づき、謎が解けたのである。賢治の「水仙月の四日」の童話に語られている日とは一日ずれてはいるが、「多くのひとが十二日に召されたことを思えば、決して外れてはいない。むしろ的中と言ってよく、そら怖ろしい予言とさえ思われる。」（P347）と「わたし」は賢治の自然への予知能力に驚いている。「「水仙月の四日」という童話が、あの日、彼を東の海のほうへ誘い出した」（P348）、「空の仕掛けが外れる」ことを自分の眼で確かめたかったのである。しかし、「起こったのは雪嵐なんかじゃなくて、津波だったの。外れたのは空の仕掛けじゃなくて、海の仕掛けだったのよ！」（P349）と「わたし」は、「彼」が「雪嵐」が起こると信じ、軽く見て海辺へ行ったのではないかと悔みながら、その結果を改めて受け止めてみた。

4.2 「彼」の死を受け止めた「わたし」

「彼」からの最後のメッセージの謎が解けたとはいえ、「死んじゃったんなら死んじゃったで、幽霊になって出てこいよ。ちゃんと「さよなら」って言ってよ。」（P337）と「わたし」は納得できなかった。そこできちんとお別れをするため、光を連れて、「彼」が「調査に向ったとされる海岸」に出かけた。そこでカイという名の中型犬を津波で亡くした親子に出会った。その犬につけていたチェーンに似ているものが砂浜で発見されたというのである。親子の話では、「あの日」に慌てて友達の車に乗って高いところに逃げたが、家にチェーンでつないでいたカイを連れに戻ろうとしたところ、ある青年に止められ、自分がカイの「チェーンを外してきますから、安心してここで待っててください」と言って、海辺に向ったとその母親が涙を流しながら語った。「作業着の、現場監督ふうの」男という言葉から、「わたし」はすぐに「彼」であることが分かったが、不思議に涙はでなかった。「だって犬も家族だもの。でも、その若いひとが代わりに走ったのは、おかあさんのせいじゃない。あくまでも、そのひとの判断なんだと思います。」（P357）と、「わたし」は却って、ずっと自分を咎めている女性を慰めてあげた。この話のお蔭で漸く、「わたし」は「彼」の死を心から受け止めることができた。

> カイに出会ったのは、彼にとっても誤算だった。ひとの命も、魚の命も、たとえ虫の命でさえも、「生きていることは、それだけで尊

いんだ」と言って、同じように敬意を払っていた彼だ。迫りくる津波から、あらゆる生きものの命が救われるよう、全身全霊で祈ったはずだ。(P362)

このように、自然に接する「彼」の態度や生き方を捉えている。見知らぬ親子の犬、人間も動物も区別せず、自然のすべての命は尊いものだと考える「彼」の究極の愛をここで知ったのである。宮澤賢治の世界観の実践者であることを自分の悲しみに堪えながら、確認している。そこには、「彼」の究極の愛の確認をしているプロセスのなかで、自然の生きものと楽しく会話しながら共生共存していけるように「彼」が残していった息子光を育てていく「わたし」の姿がある。死者、死を受け止めるまでの心の葛藤、それを乗り越え、死者の遺志を継いで、二人が敬愛していた先行者である宮沢賢治の理想を実践しているかのような姿勢や生活振りは、まさに万物に魂があるという、一種の日本文化であるアニミズム[14]にも相通じているのではなかろうか。

5．沢村鐵「もう一人の私へ」

別居中の息子三津人への手紙という形で、地震後の町の様子のほか、結婚生活や家族との絆などの回想を交えながら、津波前の人生と、「私」が生き残った経緯を語っている作品である。

5.1　母親の死から示唆された「私」

「私」は作家ではあったが、無名なため収入はわずかだった。とはいえ、他の仕事をする気もなかった。結果として、経済面ではすべて妻にかかっていた。そうした状況が何年も続いたあげく、離婚する羽目になってしまった。途方に暮れた「私」は東京を離れ、故郷に戻った。故郷に戻った理由は次のように語られている。

里帰りは仕事のためだった。ただただ自分のためだったのだ。十代の頃の記憶を刺激し、新たなインスピレーションを得ようという腹だった。(中略) 故郷というより異国に来たようなよそよそしさを感じた。思い出の場所を一つ一つ巡っても記憶と微妙にずれていたり、まるで違ったりした。(中略) 懐かしさより違和感を覚えたのだ。(PP.434、435)

このように、「私」は創作のインスピレーションを得るために、気まぐれに二十年ぶりに故郷に戻ってきた、という帰郷の動機が語られている。しかし、本来なら懐かしいと感じるはずの故郷だったが、「私」の心の底には懐かしさどころか、逆に「異国」のような感覚が湧き、故郷の一員のような帰属感は自分には全く感じられなかった。実は、自分の居場所がないという不安は若い頃からのものだった。昔の同級生を見かけても、互いにどのように二十年の隔たりを縮め、学生時代の感覚に戻れるかと戸惑っているため、声をかけなかったのだ。つまり故郷とはディスコミュニケーション、絆がないのと同然の状態と言えよう。そうした状況に置かれた「私」にはさらなる不幸なことが待ち受けていた。

それまで長年故郷の鵜住居町で一人暮らしをしていた母親が身体が思うように動かなくなったことで、親戚がいる内陸に近い遠野に引越したのだった。が、その遠野の親戚宅で倒れ病院に運ばれたことを親戚から「私」は知らされたのだった。遠野にある病院に「私」は駆けつけたが、母親は助からなかった。母親の葬儀の手配で「私」はそのまま遠野に残ることになった。そして、むかえた翌日の11日に地震が起き、「私」の仮家、つまり故郷の鵜住居町の方は津波に襲われた。一方、遠野の方は津波の被害はなかったため、遠野に残った「私」は運よくその津波から逃れることができた。このような一連の偶然の出来事が重なり、「私」は母の一生を回想している。

母親の青春期や若い頃の人生については、どんな状況だったか詳しいことは不明であるが、若くして「兄弟姉妹」の養育の責任を担わされたこと

だけははっきりしている。そのためであったろうか、結婚はできなかったが、四十代になる前に妻子のある男性との間に子供、「私」を身ごもった。母親はいわゆる「私生児」を女一人で養育したのだ。そのように苦労して育てたたった一人の子供は頼りになるどころか、早くから自分の側を離れ、東京へ行ってしまった。一生苦労してきた女は結局一人で老後を暮らさざるを得なかった。更に、脳溢血で倒れた際に側に誰も助けてくれる人がいなかったため、病院に運ばれた時には助からなかった。母親は「どちらが幸せだったのだろう。」「脳溢血で倒れて意識が戻らないのと、津波に呑まれるのとでは。」（P438）と、「私」は二つの死に方を比べて考えてみた。どちらが幸せだったか分からないが、少なくとも「母の死は避けられなかった」（P438）という運命的な結論を出さずにはいられなかった。故郷という場だけではなく、そこで生活していたたった一人の身内――この世に産み落とし、育ててくれた母親――との絆まで「私」は疎かにしてきた。

そのように、本来なら津波に呑込まれるはずだった「私」は、皮肉な言い方ではあるが、母親の死のおかげで津波から救われ、生き残った。あまりにも突然なことで、「私」自身さえも「混沌と悪夢のままだ。」（P436）とその心の内を語っている。今までの自分の人生、自分の存在は何だったのかを戸惑いながら、反省する姿勢を構えるようになったのである。

5.2　偶然に生き残った「私」の社会へのリンク

「なぜ私は生きている？　どうしてあのタイミングで母は去って行った」（P437）のか、謎の連発であった。すべてのタイミングはまるで天衣無縫のようにぴったり合っていた。結果としては、母親が「自らの死によって私を津波から救った。」（P439）それらを「偶然と片づけることもできる。だが私には、到底できない」（P440）。津波の前後の出来事を思い出して考えてみれば、たった一人の肉親まで失った「私」の帰郷によって「津波に呑まれる前と、呑まれた後の町をこの目でしかと見る機会を私は与えられた。」（P440）と語り手が結論を下している。となると、このような生き残った「私」の存在の意義はどこにあるだろうか。

津波にすべてを奪い去られ、怒りや悲しみの気持ちで一杯だった「わたし」は、「それまで意識していなかった郷土を愛する心が燃えるのを感じ、この土地のために何かしようと」（P455）人生に希望も熱意も抱き始めた。そこで、津波で破壊された母校に何らかの形で命を注ぎ、町に希望を与えようと自分なりに努力しようと思い立った。そして、元来作家だった「私」は最も発揮できる文学の創作を始め、講演の依頼にも応えた。「生者と死者とにかかわらず、全ての人への懺悔と愛を謳う手紙を」書き、「生と死と再生を高らかに謳い続ける。」（458）という前向きな生き方の姿勢を構えるようになったのである。

そのような偶然性の重なりによる一連の不運から、「私」はその必然性と向き合い、自己省察しながら、自分の生き残った意義、自分の存在の価値を見出し、生者にも死者にも自分の命を最大限に働かそうとする姿勢を構えるようになった。まさに「3・11以降、人と人との「絆」を築くことの大切さがあらゆる場面で強調されている。」[15]という鈴木斌の指摘の通り、世間に無関心だった「私」は母親の死を通して有機的なリンクで社会と繋がったのであろう。

6．石野晶「純愛」

「あの日」に主人公聡史が行方不明になった。一週間後、聡史の遺体が見付かったという知らせがM市の警察から届いた際、聡史の姪である夏美をはじめ、聡史の姉、つまり夏美の母親も、どう考えても被災地にいくはずがなかった聡史の死が信じられなかった。そこから語り手である夏美

は、聡史の持っている予知能力を語りはじめ、その予知能力に悩まされていたこと、予知能力を持っていながらなぜ津波が起きる海辺へ行ったのかを考えながら、彼の短い一生を語る、というのが「純愛」の粗筋である。

6.1　予知能力者は果たして幸せであろうか

その予知能力は一見人に役立ちそう、自慢できそうにも見えるが、聡史の能力は子供の頃から不幸を予知する段階で留まり、自分の母親でさえも例外なく、その事故から守ることはできなかった。

> 何をしても結果を変えることはできない。それが運命というものなのだと、叔父は覚ったのだ。／覚ったと同時に、叔父は絶望した。誰も助けられないのなら、どうして自分はこんな力を授かったのだろう。(P481)

予知能力を授かっていながら、人を不幸から救ってあげられない自分の存在はどんな意味があるのかと聡史は疑い始めた。自分の予知能力はほかの人よりちょっと先が見えるだけで、それ以上何の役にも立たない。運命は所詮変えられないものであろうかと悩み続けていた。

6.2　運命は変えられないものであろうか

「あの日」から四年後、津波の関連記事に村越早苗という女性の手記が掲載されていた。津波から助けてくれた男の人の外見やその男の人は助からなかったことなど、手記に書かれている描写を読むうちに夏美は、この男の人は叔父のことだと直感した。四年前の津波の発生した海沿いには親戚もいなければ、行く用事すらもあるはずもなかった叔父聡史が、なぜよりによって「あの日」に、わざわざ海沿いに行ったのか、夏美はやっと納得できたのだった。さっそく手記を投稿した早苗と面会して当時叔父が早苗を助けた様子を聞いたり、叔父の予知能力を含め、色々な生前のことを彼女と語り合ったりした。「あの日」に早苗が助けられた様子は概ね次の通りである。

津波が近づいてきたのが見えて、早苗は近くにあった電信柱にしがみついていたが、あっという間に津波が足元まで押してきた。怖くて目を瞑っている早苗の耳元に、「大丈夫ですか？」という優しい声が聞こえた。目を開けると、「男の人が波の中を漕ぐようにして」「近づいてき」て「持っていたロープを」早苗の「体に巻きつけると、それをしっかりと電信柱へと結びつけ」（P471）た。そして「大丈夫ですよ。波はじきに引きます。頑張って」（P471）と言った。暫くしたら、彼の言った通りに波が引き始めたが、その時早苗は「彼はロープを使っていない」ことに気付いた。早苗は必死に彼の手を掴もうとしても、彼はとうとう引いていく波に流されてしまった。最後に「助けてくれて、ありがとう」と彼が叫ぶのが聞こえた、という助けられた当時の状況が手記に書かれている。その「助けてくれて」という言葉で夏美は、叔父の少年時代に経験した、彼の一生を変えた出来事を思い浮かべた。叔父がなぜ早苗を助けに行ったのか、その謎も解けた。

聡史の一生を変えた少年時代の経験とは、母親と海辺へ泳ぎに行った時の出来事であった。足がつって溺れそうになった時、たまたま近くで泳いでいた水泳の上手な少女に助けられた。

> こんなにも小さくて特別な力のない子でも、人を助けることができるのだ。それなら自分にも、できることがあるのかもしれない。そう気がつくと、涙が溢れてきた。(P483)

その少女がすなわち、早苗であった。わずかな時間の出会いであったが、最後の早苗の笑顔は聡史の心に焼き付けたようであった。叔父聡史から聞いた話はそこまでであったが、「叔父はその瞬間、彼女に恋をしたのだ。たった一度会っただけのその人のことを、それからもずっと想い続けていた。二十年以上が経ち、大人になって姿が変わっても、一目で彼女だとわかるほどに。」(P483)と、夏美は叔父の心を推測している。

そのような深い愛の力、本当の愛の力があった

からこそ、あの日の津波の発生や少年時代自分を助けてくれた少女早苗が津波に呑み込まれることを予見できた聡史は、その恩返しとして早苗を助けるためにわざわざ海沿いに赴いたのであった。「一人の命を救うためには、一人の命を身代わりに差し出さなければならない。」（P484）という人の運命を変える方法を叔父が見つけたと夏美は語った。

聡史が自ら命を捨ててまで、自分、否、当時身ごもっていたため、一挙に親子二人を助けてくれたことに対し、「助けていただいた命を大事にして生きていきます。それが生き残ったものの務めですよね」（P485）と、早苗が聡史への恩返しとして感謝しながら改めて生き残った意義を語ったのである。震災後、生かされた人の社会へのリンクが改めて考えられ、更に人生にポジティブになるようにと言われる。裏を返せば、生かされた人の愛が最大限に謳われ、生き生きとしている姿を見せるのは、亡くなった方へのメッセージ、亡くなった方の魂との交流ではなかろうか。

7．結び

小森陽一の『死者の声、生者の言葉――文学で問う原発の日本』という著書には「生き残っている私たちは、どのようにして「死者」の「声を聴」くことができるのか。書き記され、あるいは印刷され、またメモリーに残された文字を読むことと、経験の想起と想像の実践の中でなら「死者」の「声を聴く」ことが可能になるはずだ。」[16]という一節がある。10年の歳月で3・11の大惨事が風化しつつある中、被災地出身の作家たちが四年間かけて漸く自分の周りの被害、親族の死を書くという行為を通して震災と向き合い、心の痛みを消化するとともに死者の声に耳を傾けることを試みたという姿勢が読者の私たちに伝わってきた。これらはすなわち、多和田葉子や川上弘美など非震災地出身の作家と着眼点がもっとも異なっているところであろう。

一般の人々に比べ、もっと死者の声に耳を傾け、またその心が聞こえるそれらの作家が伝えようとする共通のメッセージは様々な愛と言えよう。祖父江孝男は人間が災害に遭った際の反応や態度について以下のように語っている。

> 宗教は超自然的なものに対して、祈りやその他の手段を通じて人間の意志を伝え、人間の期待する結果を超自然の力によって与えてもらうよう援助を求めることにほかならない。したがって当然そこに生まれるのは、超自然の力に対する畏怖の念、依存の気持、そして懇願的な感情だ。[17]

人類学、宗教学的な視座による見解である。超自然とは宗教でいえば宇宙の主宰者である神様であるのは言うまでもない。人間の力では到底逆らえない災害に遭遇している際、神様や超自然的なものに助けを求めるのが最も普遍的な行為であろう。しかし、以上考察してきた作品、「さるの湯」はちょっと異質に見えるが、それ以外の四つの作品は本能的な人間の愛（「あの日の海」）、万物への愛（「水仙月の三日」）、母親の愛及びそれへの報い（「もう一人の私へ」）、命より尊い愛（「純愛」）など、ここでは神様など超自然の力に頼る従来の人間の自然観の代わりに、人間の力、というより死者の愛を讃える作者達の意図がうかがえる。そのなか、「純愛」に描かれている主人公聡史が津波の襲来を予知していながら、かつて自分を救ってくれた女性、ひそかに恋心を抱いていた女性の所へ駆けていき、自分の命を犠牲にするまで、彼女を助けたのは究極の愛と見なせよう。そして、「水仙月の三日」に語られている主人公「彼」が見知らぬ人の犬を助けるために、躊躇わず、犬の所へ駆けつけた行為は最も崇高な愛、分別のない慈悲極まる愛としか言いようがない。「彼」が尊敬する先行者である宮沢賢治の理想、すべての生き物の共生共存を唱える世界観が「彼」にしっかりと伝っている。「彼」は賢治の代わりにその世

界観を実践したのであろう。

そして、「さるの湯」では、映像という手法を用いて、死に切れず、彷徨っている魂が自己省察しながら、心の深層に根差していた恨みや過ちへの凝視を通して恨みを解かしてから漸くあの世へ渡ることができた。それは一種の鎮魂の働きであるほか、その傷がどれほど深かったものか、死者の代わりに伝えようとする作者の意図も読み取れよう。こうした3・11で見えた愛の交流や自然との共生共存の世界観、また死者との心の交流などは、挫けている気配は見られず、前向きでポジティブな姿勢はいたるところに感じられる。関東大震災を目の当たりにした田山花袋の「人間はしかしそんなに弱いものではないと私は思つた。何んな中からでも、何んな悲惨な状態の中からでも、屹度新しい芽が生えた。新しい心が萠えた。新しい恋が培はれた。」[18]という立ち直ろうとする明るい姿勢と相通じているのではなかろうか。「純愛」にある「助けていただいた命を大事にして生きていきます。それが生き残ったものの務めですよね」（P485）という助けられた早苗の言葉、また「もう一人の私へ」の生き残った「私」の「生者と死者とにかかわらず、全ての人への懺悔と愛を謳う手紙を」書き、「生と死と再生を高らかに謳い続ける。」（P458）というセリフは、まさに被災地出身作家たちが郷土の人々の代わりにほかの地域や国、また後世に伝えようとする心境そのものではなかろうか。また同時に地元作家だからこそできる被災者のもつれた感情を解きほぐすための愛の贈り物ではなかろうか。

注

1　高橋克彦「さるの湯」、北上秋彦「事故の死角」、柏葉幸子「お地蔵様　海へ行く」「風待ち岬」「海から来た子」、松田十刻「愛那の場合～呑ん兵衛横丁の事件簿より」、斎藤純「あの日の海」、久美沙織「長靴をはいた犬」、平谷美樹「加奈子」、澤口たまみ「水仙月の三日」、菊池幸見「海辺のカウンター」、大村友貴美「スウィング」、沢村鐵「もう一人の私へ」、石野晶「純愛」

2　震災直後にも岩手県の作家たちによる『12の贈り物　東日本大震災支援　岩手県在住作家自選短編集』（荒蝦夷刊2011）が刊行された。ただしそれは印税を被災地への支援という目的で既発表作品をまとめて出版したものである。

3　石井正己（2015）「私たちは文学を伝えられるか――東日本大震災後の文学研究から――」『日本文学』（特集・時を越えて伝える）V64、No5、日本文学協会、P9

4　曾秋桂（2016）「エコクリティシズムから読むポスト311文学作品―多和田葉子『献灯使』を中心に―」『台湾日本語文学報』39期、台湾日本語文学会

5　日本、韓国及び台湾の作家や研究者が災害文学について議論した成果をまとめて出版した論文集である。

6　『お茶の水女子大学　比較日本学教育研究センター　研究年報』第15号、お茶の水女子大学

7　『日本語日本文学』第49輯、輔仁大学外国語学院日本語文学系

8　北田幸恵（2015）「米谷ふみ子と反戦――ヒロシマ・ナガサキから〈ふくしま〉以後へ」長谷川啓／岡野幸江『戦争の記憶と女たちの反戦表現』、ゆまに書房

9　「三・一一以後のフェミニズムは、このように環境も人間自身も侵犯された状況の中で、あたらめて、「いのち」という根本的次元に立ち返って考えなければならないのではなかろうか。（中略）他者を孕む女性の自己をありのままに生かして生きたい、と発想するのである。」と長谷川啓が、「いのち」と女性の関係や女性の社会における位置づけを究明している。（長谷川啓（2012）「3・11後のフェミニズムに向けて」『〈3・11フクシマ〉以後のフェミニズム――脱原発と新しい世界へ』、新・フェミニズム批評の会、お茶の水書房、P97）

10　成元哲（2019）「原発による不安とコミュニティ分断――避難区域外原発事故被害の核心」『環境と公害』V.48、No.3、岩波書店、P54、55

11　『あの日から』に収められている平谷美樹の「加奈子」には、主人公の加奈子は東京でのバイト先で、月命日にぼうっとなっている時、社長に「月命日？　津波のあった日か？」「津波から何年経ってるって思ってるんだ？一ヶ月に一回、十一日になればグジグジとして仕事をさぼられたら、たまったもんじゃないよ！」（P259）と罵られているシーンも、津波の被害が風化していることを物語っているのであろう。

12　古川日出男も被災地福島の出身者であるが、『馬

たちよ、それでも光は無垢で』はルポルタージュかフィクションなのか、どこから小説なのか判明しないことで議論されているため、今回は研究対象外とする。

13　渡部芳紀（1982）「「水仙月の四日」論」『國文學解釈と教材の研究』27（3）、學燈社、P85

14　鶴田欣也は、「日本文化のそういう生態系はアニミズムだ。自然界のあらゆるものが霊魂を持っていて、互いに影響し合いながら自然界を形成していると考える思想だ。」と日本人の自然観について述べている。平川祐弘・鶴田欣也　編著（1994）「まえがき」『アニミズムを読む―日本文学における自然・生命・自己』、新曜社、P10

15　鈴木斌（2016）『文学に描かれた大震災―鎮魂と希求』、菁柿堂、P33

16　小森陽一（2014）『死者の声、生者の言葉―文学で問う原発の日本』、新日本出版社、P163

17　祖父江孝男（1990／1979初版）『文化人類学入門』、中央公論社、P153

18　田山花袋（1995）『定本　田山花袋全集』第23巻、臨川書店、P369

参考文献

テクスト：

道又力編（2015）『あの日から　東日本大震災鎮魂　岩手県出身作家短編集』、岩手日報社

石井正己（2015）「私たちは文学を伝えられるか――東日本大震災後の文学研究から――」『日本文学』（特集・時を越えて伝える）V64、No5、日本文学協会

川上弘美（2015（6刷）、2011第1刷）『神様2011』、講談社

北田幸恵（2015）「米谷ふみ子と反戦――ヒロシマ・ナガサキから〈ふくしま〉以後へ」長谷川啓／岡野幸江）『戦争の記憶と女たちの反戦表現』、ゆまに書房

小森陽一（2014）『死者の声、生者の言葉―文学で問う原発の日本』、新日本出版社

鈴木斌（2016）『文学に描かれた大震災―鎮魂と希求』、菁柿堂

成元哲（2019）「原発による不安とコミュニティ分断――避難区域外原発事故被害の核心」『環境と公害』V.48、No.3、岩波書店

曾秋桂（2016）「エコクリティシズムから読むポスト311文学作品―多和田葉子『献灯使』を中心に―」『台湾日本語文学報』39期、台湾日本語文学会

祖父江孝男（1990／1979初版）『文化人類学入門』、中央公論社

田山花袋（1995）『定本　田山花袋全集』第23巻、臨川書店

長谷川啓（2012）「3・11後のフェミニズムに向けて」『〈3・11フクシマ〉以後のフェミニズム――脱原発と新しい世界へ』、新・フェミニズム批評の会、お茶の水書房

范淑文（2019）「作家に語られた震災―多和田葉子を中心に」『お茶の水女子大学　比較日本学教育研究センター研究年報』第15号、お茶の水女子大学

范淑文（2020）「作家が語る311―川上弘美と多和田葉子を中心に―」『日本語日本文学』第49輯、輔仁大学外国語学院日本語文学系

平川祐弘・鶴田欣也　編著（1994）『アニミズムを読む―日本文学における自然・生命・自己』、新曜社

渡部芳紀（1982）「「水仙月の四日」論」『國文學解釈と教材の研究』27（3）、學燈社

中国語文献：

崔末順、吳佩珍、紀大偉（2018）『生態與旅行：台日韓當代作家研討會論文集』、秀威經典